**防火：当時と現在**

合掌造りの家屋は、白川郷の住民にとってさまざまな点で理想的であったが、木造で萱葺き屋根であるため、火災には弱かった（今もそうである）。さらに、家の中では伝統的に囲炉裏が調理や暖房に使われていたため、その燃えかすがが屋根裏や家の他の場所に燃え移る危険もあった。

歴史的な防火対策は、火災を防ぐことよりも、火災を食い止めることに重点が置かれていた。例えば、家屋と家屋の間に十分な空間を確保し、火災が家屋から家屋へと飛び火しないようにすることであった。また、家とそれに付随する倉庫との間にも十分な空間を確保していた。

現在、白川郷や合掌造り民家園野外博物館では、防火対策を徹底している。指定された場所以外での喫煙は禁止され、すべての建造物に煙探知機が設置されている。また、火災の危険がないか1日3回までパトロールを行い、定期的に消防訓練を実施している。

現代的な対策として目を引くのは、高出力の噴流水を空高く噴射する放水銃である。この噴流は屋根に向けたり、構造物の間に水の壁を形成するように調整したりすることができる。通常、この装置は見学することはできない。しかし、年に2回行われる訓練では、何十台もの放水銃が次々と噴射し、その印象的な光景は街中のポスターにも描かれている。